

2020年度 公募制推薦入学試験 問題用紙

日本語学科A方式	小論文	受験番号						氏名	
----------	-----	------	--	--	--	--	--	----	--

次の文章を読み、後の問（問1～問4）に答えなさい。

八年ほど前、東京を①ブタイにした『ロスト・イン・トランスレーション』（ソフィア・コッポラ監督、二〇〇三年）というアメリカの映画が、日本で上映され話題を呼んだ。タイトルは、英語をそのままカタカナにしたのだが、およその意味は「トランスレーション（通訳や翻訳において失われたもの）」ということである。

映画のなかでは通訳の苦痛からカルチャーショックまで、通訳の②フビが原因で生じる③イシソツウの④トラブルをユーモラスに描く場面がたくさんあったので、笑いながら見ていて、「やはりコミュニケーションは A 力ばかりではない」としみじみ思った。

一方、私自身にも通訳や翻訳の経験があるので、映画のタイトルにはいろいろと考えさせられた。確かに、トランスレーションには、翻訳家（通訳者）がどんなに努力しても、細かい意味から感情やインパクトまで、さまざまな「もの」が失われてしまう。それはやむをえないことではあるが、空しさを覚えるものである。時代的にも⑤ヘダタリのある古典文学を翻訳する場合は、なおさらである。

しかし、果たして翻訳は、⑥シュウシ、マイナス的な活動ばかりであると言い切れるのだろうか。翻訳を通じて何も得られないのだろうか。

オリジナル作品の言語を知らない数多くの読者にその作品を知ってもらうという翻訳の役割に関しては、あえて説明する必要もないほど一般に認められている。さらに、翻訳には、その他にも、ふだん見逃されている重要な役割がある。オリジナル作品そのものの特徴を浮かび上がらせることである。作品の文化に属している人たちにとっては、あまりにも「当たり前」になっているので、見えなくなってきた特徴を、翻訳がくっきりと見えるようにしているわけである。

ツベタナ・クリステワ「翻訳を通じて得られるもの」（『心づくしの日本語—和歌でよむ古代の思想—』筑摩書房）

- 問1 傍線部①「トラブル」の具体例を一つあげて、40字以内で説明しなさい。
- 問2 傍線部①～⑤のカタカナを漢字で正しく答えなさい。
- 問3 空欄Aにあてはまることばを、本文中からぬきだし、漢字で正しく答えなさい。
- 問4 この文章を読んで、あなた自身がこれまでに本で読んだり、映画やドラマ、アニメなどで見たことのある「翻訳」「通訳」された作品の一つとりあげ、具体例をあげながら、「翻訳」「通訳」の役割について400字以上500字以内で論述しなさい。

